

# 子どもの英語勉強、効果は？

## ナゾ謎 かがく

は前頭葉の左側にあり、文章を見て構文などで文法的な判断を下すときに活動が高まる。

よくなるのがわかってきた。「活動を節約した省エネモードになる」と酒井准教授は話す。

ニングを行って知識量で長期学習者と差が出ないようにした。テストは文法や単語のつづりの間違いを指摘する比較的簡単な内容。

テスト後、両グループ

これまでの研究で、中学校で英語の勉強を始めたころ、文章を読むと文法中枢が非常に活発に働

それでは英語の勉強を早くから始めた場合はどうか。今回、小学校一年から六年間、授業の半分

で同程度の成績を残した生徒たち同士で脳活動を比べてみた。すると小学校から勉強していた長期

## 開始時期より継続が重要

外国語の勉強は子どものころから始めた方がよく身に付くと言われる。しかし、最新の脳研究によると、少なくとも英語の文法力については勉強を始める時期によって習得の度合いに大きな差が生ずることはないという。

くが、習熟度が上がるにつれ次第に活動を上げながらも文章が理解できる

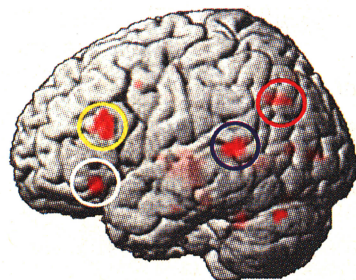
以上を英語で受けた中学一年生と、英語を学び始めた中学一年生に同じ英語のテストを受けてもらい、試験中の脳の活動を調べた。

学習者の脳活動は短期速習者の活動に比べて小さい「省エネモード」であることがわかった。

東京大学の酒井邦嘉准教授らは、英語の勉強を続けると脳の「文法中枢」にどんな変化が起きるかを調べている。文法中枢

後者の中学生には、文法知識について二カ月間のトレーニング

これを過去の研究成果と合わせて考えると、勉強を小学生で始めても中学生で始めても、六年ほど勉強すると同じ変化が



短期速習者の左脳の機能的磁気共鳴画像装置（fMRI）像。活動が高い場所のひとつが文法中枢（左上の円）＝酒井准教授提供

文法中枢に起きるといふことになる。「英語力を定着させるには学習開始時期よりも、六年間くらいの長い間にわたり英語に触れ続けることが重要だ」と酒井准教授。

この見方は早期教育を否定するものではない。早くから勉強を始めればそれだけ早く習熟し到達度も高まっていくと推測できるからだ。むしろ大事なのは「早く始めなければ習熟できない」わけではないという点だ。

人はどうやって言語を習得していくのか。脳科学でも人類学でも未解明のナゾだ。新学習指導要領で小学生高学年での外国語活動が必修化されることに賛否両論様々な意見がある。私たちは脳と言葉についてまだ知らないことが多い。